

# 日本におけるボート競技の起源についての考察

古城庸夫\*

## 要約

ボート競技の起源については、長く口伝として長崎でオランダ人がボートを漕いでいた。また横浜で慶応2年に山下町でバージクラブというローイングクラブがボートを漕いでいたが、正確な記録は残されていないと伝えられ、慶応2年には明確に横浜でボートレースが行われたといわれている。

近年になって各大学の端艇部・漕艇部・ボート部と呼ばれているボート競技を行う競技部が、創立100周年を迎えるようになり、多くの記念史が発行されている。

しかし、そのいずれもがボート競技の起源についての記述は、先輩からの口伝に頼っている状態であり、各種の日本のスポーツを記した書物でもこの口伝を採用している傾向が多いと思われる。

またボート競技に用いられている艇が、他の人力によるボートと混同されて多くの誤解を生じていると思われることから、既存記録の検証と新しい資料の発見を試みた結果、ボート競技の起源について新たな発見がもたらされたということができよう。

キーワード：ボートレース、レガッタ、端艇、競漕

## はじめに

明治期から今日まで、ボート競技の書物が数多く刊行されている。しかしそれらの多くは技術的な内容が主で、ボート競技の起源をイギリスに求めている場合が多い。したがって日本におけるボート競技の起源に言及している場合は非常に少ないが、昭和11年(1936年)に東京帝国大学ボート部<sup>(1)</sup>出身で東京日日新聞(現毎日新聞社)の久保勘三郎によって東京帝国大学漕艇部五十年史が刊行されたことで、日本の学生による隅田川で行われ始めたボート競技の始まりが詳細に明らかにされた。

しかし東京帝国大学漕艇部五十年史では、学生が始めたボート競技の起源以外には触れられてい

ない。はじめて学生以外の日本におけるボート競技の起源に触れたのは、昭和12年(1937年)に大日本体育協会から刊行された大日本体育協会史下巻の日本漕艇協会史(宮木昌常、編集担当委員・日本漕艇協会役員・早稲田大学ボート部出身)であろうと思われる。

日本漕艇協会史によれば、

「之をスポーツとして、体育として用いた記録に至っては、或いは長崎に居住した和蘭陀人(オランダ)又は和蘭人と称した外国人がやって居たかは知れぬが、確然としたものはない。今日最も確かなのは維新直前横浜開港間もない慶応二年に、横浜山下町十二の海岸通りにバアーヂ<sup>(2)</sup>と称するローイング倶楽部が出来、スライディング・シートのボートなどを備え付けた在留外人連盛んに漕ぎまわっていたのが、初めだと云ってよい。之が今の横浜アマチュア・ローイング倶楽部の前身である」<sup>(3)</sup>

2008年11月28日受付

\* 江戸川大学 経営社会学科専任講師 近代スポーツ史、コーチ学

と書かれている。

これら東京帝国大学漕艇部 50 年史と大日本体育協会史を参考にして、慶応大学ボート部出身で時事新報社の宮田勝善（日本漕艇協会役員）が久保勘三郎と協力して昭和 32 年（1957 年）に発行したのがボート五十年である。

これによれば、

「このボートをわが国で、スポーツとして最初に利用したのは、長崎在留のオランダ人と言われている。しかしこれも口伝で、正確なことはわからない。今日、記録として残っているのは、横浜開港間もない慶応二年、横浜市山下町十二番地の海岸通りに、バージというボートクラブがあって、英本国から取り寄せた数隻の滑席艇<sup>(4)</sup>をもっていたのが、最初といわれている」<sup>(5)</sup>

と書かれているが、文中にも口伝<sup>くちづて</sup>とあるようにボート競技の起源は明確には明らかにされていない。

そこで本研究では、新たに発見された資料から日本のボート競技の起源について明らかにすることを目的とする。

## 1. 既存記録の検証と新しい資料の発見

『東京帝国大学漕艇部五十年史』（久保、1936）と『大日本体育協会史下巻日本漕艇協会史』（大日本体育協会、1937）の発行以降、第 2 次世界大戦の影響を強く受け日本では記念史等の発行は行われていなかったが、戦後の混乱期を乗り越えて発行されたのが『ボート五十年』（久保・宮田、1957）だった。

さらに昭和 34 年（1959 年）日本体育協会から発行された『スポーツ八十年史』におけるボートの歴史によれば、草分け時代として

「日本でボートを漕いだのは、なんといっても海軍と在留外人が初めてのようである。横浜のアマチュア・ローイング・クラブなどはずいぶん古い時代からあって、その組織もかなり完備していたようである」<sup>(6)</sup>

と述べて口伝の域を出ていない可能性を示している。またその巻末の日本スポーツ年表は明治 4 年（1871 年）以降の項目で体操と水泳の事項を採用し、ボート競技としては明治 15 年（1882 年）体操伝習所が石川島造船所に命じボートを新造させた、と書かれている<sup>(7)</sup>。

また『日本体育協会五十年史』（日本体育協会、1963）の日本漕艇協会の項目では、

「日本の漕艇の歴史は明治十年頃東京大学の前身である大学南校が、外国捕鯨船の搭載ボートを数隻購入したことに始まる。それまでも居留外人の間では行われており、長崎在留のオランダ人が最初にボートを漕いだといわれているが、確かな記録として残るものは慶応二年に開港間もない横浜の山下町海岸でボートレースが行われたことである」<sup>(8)</sup>

と書かれているが、それらは巻末の日本スポーツ年表にも採用されていない。

また『ボート百年』（宮田、1966）では、

「日本で最初にボートを漕いだのは長崎在留のオランダ人だという。ヨットや、四人漕ぎ滑席艇を母国から取り寄せたというが、正確な記録は残っていない。

記録的に最も古いのは、慶応二年（1866 年）横浜市中区山下町 12 番の海岸通りに、イギリス人が中心となり、本国から持ってきた数隻の滑席艇で、バージ・クラブを創ったことで、これは横浜アマチュア・ローイング・クラブ（Y. A. R. C.）の前身である」<sup>(9)</sup>

と書かれているが、これまでに発行された本と同じように、日本におけるボートレースのおこりについては明確にされていない。

ただ、ボート百年が書かれた昭和 41 年（1966 年）以降に書かれた、日本の体育史やスポーツの歴史について書かれた本の中にはこの『ボート百年』からの引用と思われる記述が目立つ。

たとえば、今村嘉雄によって書かれた『日本体

育史』の欧米スポーツの伝来という項目には（今村，1970），

「漕艇は幕末に幕府が築地に講武所を作り，同所で軍艦操練をはじめると，バッテリー<sup>(10)</sup>漕ぎの練習も行われるようになり，横浜の外人たちは慶応二年（1866年）本国からボートを取りよせてレースを行っているし，明治になっては，官立学校で盛行するようになる」<sup>(11)</sup>

と書かれており，慶応二年を日本で行われたボートレースの起源ではないかと述べられているからである。

また『日本スポーツ創世記』（遊津，1975）の明治20年頃までのスポーツという項目には，

「ボートは外人や外国水兵などによって維新前後からおこなわれ，海軍兵学寮で行われていた」<sup>(12)</sup>

としか書かれていない。

そして昭和51年（1976年）に宮田勝善により改定新版として発行された，ボート百年の記述もボート50年と同じような記述で新たな事柄は述べられていない。

このように日本のボート競技の始まりについて書かれた多くの著作にあたってわかることは，記述が曖昧であるがゆえに特定しがたい，ということである。さらにその原因について再考してみると，実はボート競技そのものの捉え方に矛盾があるのではないかとこの視点が浮かび上がってくる。

今日，「ボート競技」と言えば，オリンピック大会などで行われているように，競技用に特別に作られた艇とオール（櫂）を用いて2,000mのタイムを競うものを指すが，一般的に「ボート」と言えば，公園及び海浜あるいはお濠などの水空間に見られるような娯楽的ボートを思い浮かべるのが普通だろう。この違いを踏まえて考えられていないからこそ，日本におけるボートの起源も曖昧になっているのではないだろうか。

水に浮き人が漕いで進むボートの起源はよく知

られていないが，比較的小さなボートは港の深度が整備されていない時代に大型の船は岸壁に着岸出来なかったと思われることから，沖に停泊する大型艦船と陸地を結んで人員と荷物等を運搬するために人が漕ぐボートというものが利用されるようになったのではないと思われる。それはかつてのイタリアのベニスに見られるゴンドラや，イギリスのテムズ川河口に見られるような小型のボートの活躍した一つの時代を示す極めて便利な道具であったと考えられる。

そして人や荷物を運ぶために作られていったと思われるボートが，それを操る人の自然な営みの中で近代化により高い効率を求められるようになった結果，他のボートを漕いでいた職業人と時間と金銭を競うことの快感を知るようになって生じたのがボート競技のレースではないだろうか。

やがてボートレースに見られるボート競技がテムズ川に誕生したが，勝敗に金品を授与するようになった結果，他競技に先駆けてプロ選手の誕生を見たといわれている。

しかしテムズ川における大学生の剣牛レース<sup>(13)</sup>（オックスフォード大学とケンブリッジ大学のエイトによる対校戦）が，市民の人気と賭けの対象になると，さらに注目を集めるようになり，母校の勝利を求めるあまりOBやプロのボート選手をボートレースに出場させるような事態が出現した。たとえば，図1はイギリスのテムズ川で開かれたヘンリー・ロイヤル・レガッタの絵葉書で，ボートコース両側に観客が多数見られる。艇は競技用エイト（8人漕ぎ+コックスの9人乗）である。

結局そのことが世界で初めてボートレースというスポーツにおいてプロ選手の出場を認めないというアマチュア規定の出現を見ることになるが，こうして他競技と同じように多くの偶然から人と物を運ぶために生まれたボート（小型の舟）が，時間を競う競技へと昇格していったのではないと思われる。

つまり，一般的に「ボート」と呼ばれているものは，人と物をオールという道具を使って運ぶ小型の舟であるボートと，決められた距離を開発さ



図1 ヘンリー・ローヤル・レガッタ 明治38年(1905年)

れた艇とオールで進みタイムを競う競技であるボートへと分化していったのではないかと考えられる。

またイギリスで誕生し諸外国でも行われるようになっていた競技用ボートは、外国人居留地に住むイギリス人などを仲介として本国から取り寄せられるようになっており、その競技用ボートと、幕末の日本を訪れた艦艇が使用していたボートのふたつが幕末前後の日本に存在していたのではないかとと思われる。

そして、当時の日本に「レガッタ」という言葉を表す的確な訳語が誕生していなかったために、本来ヨットや櫓を漕ぐ和船も含めて条件や距離を変えて同じ大会で種目ごとに速さを競い合うという試合内容が競技用ボートを用いて行うボートレースの事を意味するようになっていったと思われるのである。

これらの認識の違いによる影響は、『漕艇75年』(日本漕艇協会, 1995)に書かれたわが国最初のボートという項目にも見られる。

「日本で最初にボートを漕いだのは長崎在留のオランダ人だと伝えられるが、正確な記録は残っていない。確かな記録に残るものは、慶応二年(1866年)横浜・山下町の海岸でイギリス人が中心となって、本国から持ってきた数隻の滑席

艇で、バージ・クラブを創立したのが最初とされ、さらに最初のボートレースとして記録されているのは、明治2年(1869年)4月英国ビクトリア女王の誕生日を祝う記念レースである。この競漕は横浜に停泊中の英国軍艦の水兵たちの中で争われたという」<sup>(14)</sup>。

つまりこの記述によれば、日本でボートを最初に漕いだのは長崎在留のオランダ人だと伝えられている。競技用の滑席艇を漕いだ記録の起源は、慶応2年(1869年)であろうと思われる。また最初のボートレースとして記録に残されているのは、明治2年(1869年)4月であるとされているが、水兵によるレースに使用された艇の種類が書かれていない以上、厳密には競技用のボートを用いた最初のボートレースとは考えにくいと思われる。

おそらくこの明治2年(1869年)を最初のボートレースとするという、記述の根拠になっているのは、ボート五十年に書かれている以下のような記述によるものと思われる。

「おそらくバージ倶楽部の選手も、滑席艇で参加したことであろう」<sup>(15)</sup>。

しかし、バージ倶楽部の選手がボートレースに参加したとの記録は、見つかっていないことからボート競技における最初のボートレースとは一概に言えないのではないかとと思われる。

おそらくそのような誤解は、明治初期の日本人によるボートが、バッテリーやギグ<sup>(16)</sup>あるいはカッター<sup>(17)</sup>と呼ばれたいろいろの形をしたボートを混在して使用していたからではないかと考えられるのである。

『近代体育スポーツ年表』（岸野雄三編著，1996）によれば、

「明治2年5月24日イギリス女王ビクトリアの誕生日を祝し、イギリス兵、横浜で小舟の競漕会を挙行」<sup>(18)</sup>

とある。この記事の出典は石井研堂による『改訂増補明治事物起源』（1944）であるということが判明したが、近代体育スポーツ年表の文献リストにはこれ以外のボート競技関連の文献は見出すことが出来なかった。

また、当時日本には多くの外国人居留地が存在していたことがわかっているが、『築地外国人居留地』（川崎晴朗，2002）にはボート競技関連の記述を見出すことが出来なかった。

そのため他の外国人居留地について書かれた文献を求めたが、長崎外国人居留地の研究（菱谷武平，1988）の中にもボート関連の記事を見出すことは出来なかった。

ただ、『居留外国人による・神戸スポーツ草創史』（棚田真輔，1976）の中に

「明治3年（1870年）香港から神戸に来て医療会館を築き、リーウェリン商事会社に加入したA・C・シム（Alexander・Cameron・Sim）が、スポーツ活動と社会活動を含めたようなクラブが必要であると考え、イギリス人の同僚とアメリカやドイツ人などの協力を得て、同年9月23日にKobe・Regatta & Athletic Club（KRAC）を創設した。またKRACは同年12月24日にボートハウスと体育館の落成式を挙

行し、第1回のレガッタ競技を開催して、神戸での外国人によるスポーツ活動を華々しくスタートさせた」<sup>(19)</sup>

との記述を発見したが、明治3年（1870年）に行われたレガッタで、ボート競技の種目が行われたことを特定することは出来なかった。

しかし文中には

「明治4年（1871年）には横浜に遠征し、横浜にあった横浜レガッタ競技クラブ、ニッポンレガッタ競技クラブと対抗し、神戸は4試合に負けたが、ハンデーなしの競技では、ニッポン競技クラブには軽く勝った」<sup>(20)</sup>

と書かれており、明治4年（1871年）には横浜で神戸・横浜インターボート・レガッタ競技会が開催されたことが判明した<sup>(21)</sup>。

このことが昭和52年（1977年）に初版発行された居留外国人による・横浜スポーツ草創史（山本邦夫・棚田真輔共著）と平成16年（2004年）1月発行の神戸外国人居留地研究会年報・居留地の窓から第4号の発見につながり、横浜や神戸、長崎における外国人居留地でのスポーツ活動の中でもボート競技の起源について、より詳細な事柄を明らかにすることが可能になったのである。

## 2. 横浜外国人居留地におけるレガッタの起源<sup>(22)</sup>

幕府が長く取っていた鎖国政策の間は、長崎の出島を通して諸外国の情報を得ていた日本は、次第にイギリス・アメリカ・フランス・ロシア・オランダなどの欧米列強による開国要求に直面するようになっていったと思われる。

開国の決断を下したのは、2度にわたるM.C.ペリーの来航であったが、開国後は安政6年（1859年）神奈川（横浜）長崎 安政7年（1860年）文久3年（1863年）兵庫（神戸）に外国人の居留を許し永久居住を認めた外国人居留地を建設した。

また同年9月になると通商条約を締結した諸国の軍艦が横浜港に姿を見せ始め、常時20隻前後が停泊しては交代で上陸し居留地民を警備していたと思われる。

また10月上旬には24隻の軍艦が停泊していたが、一番軍艦の数が多かったのは16隻を数えたイギリスであった。また24隻の軍艦の乗組員と駐屯していた部隊の合計人数は約8,000名にも上る。そして当時外国人居留地にいた外国人の内訳では、総数209人中の91人をイギリス人が占めておりその比率は約44%にも上る。

このことは明治新政府に対して影響力を強化したいというイギリス側の思惑があったものと思われるが、このことが後に開国したばかりの日本がイギリス的なスポーツ観の影響を強く受けていったことになるのではないと思われる。

すなわちスポーツを行うものはルールを順守し、さらに紳士的でなければならないとか、スポーツを通して強い肉体を育成することが良い兵士の育成につながるという、当時の大英帝国として世界に名をはせていたイギリスで生まれたアスレティズム思想<sup>(23)</sup>の影響を強く日本が受けていくことになると思われる。

また居留地に居住していた外国人たちは、このように多くの軍隊を駐屯させていたが、次第に居

留地の拡張と整備を幕府に要求するようになっていった。さらに居留地内の行政権を握ると、居留地内で本国の生活様式そのままの日常を過ごしていったと思われる。

したがって軍人や市民の健康状態を改善するという名目で、スポーツ施設などの建設を幕府に要求するようになっていくが、そのことが逸早くイギリスで誕生したスポーツの多くが行われるようになった一因と思われる。

横浜のボートは文久3年(1863年)頃から港に停泊中のイギリス艦隊の乗組員によって行われていたレガッタに、居留地の外国人が参加するようになっていったのは慶応元年(1865年)頃であるといわれているが、どのような種目に参加したのかという詳細な記録はない。

また慶応2年(1866年)イギリス人が中心となり、通称フランス波止場(現在の中区山下町12番地)にボートハウスを建設しバージー・クラブというクラブが創設された。

そして明治4年(1871年)に行われた神戸・横浜インターボート・レガッタ競技会を期して横浜レガッタ競技クラブとニッポンレガッタ競技クラブの二つが統合して出来たのが横浜・アマチュア・ローイング・クラブ(YARC)であろうと思われる。図2は「横浜海岸ボートクラブ」とい



図2 横浜海岸ボートクラブ

うキャプションのついた絵葉書で、当時の様子が伺える（中央にはボート競技用の舵付きペア艇が見える。明治40年：1907年～大正6年：1917年と推定される）。

またバージー・クラブは年間12ドルの会費で競技用ボートやヨットを提供した他には、2階のホールなども提供したと思われることから、外国人の社交場的な役割も果たしたと思われる<sup>(24)</sup>。

また明治4年（1871年）に行われた神戸・横浜インターボート・レガッタ競技会について、幕末に来日し週刊英語新聞（ジャパン・ヘラルド）を発行し活躍したイギリス人ジャーナリストのジョン・レディ・ブラック（John Reddie Black）はボートレースに対して次のように述べている。

「それは神戸の運動競技・競漕クラブの会員が、陸上と水上における親善試合をするために横浜に来たことだ。ボートレースでは神戸軍は、4本オールレースで負けたが、2双スカル対2双オールレースでは神戸軍はスカルのほうを取って勝った」<sup>(25)</sup>。

つまり前述のように、この試合ではKRACがボート種目の舵付きフォア、もしくは舵なしフォア種目では負けたが、2種目のうちどちらかを取って競うダブルスカル対舵なしペア<sup>(26)</sup>のレースでは神戸軍がスカル種目を選択して勝利を収めたと述べていると思われるがボート競技種目の断定は出来なかった。

しかし（居留地の窓から）の中に、神戸レガッタ・アンド・アスレティック・クラブ百年史ハロルド・S・ウィリアム著（Harold S. Williams）<sup>(27)</sup>が翻訳された記事を見出すことが出来た。

それによれば、

「ボートハウスは、4本オールのボート8台を充分格納できる広さだった。さらに、小さいボートも何台か置くことができた」<sup>(28)</sup>。

また明治4年（1871年）に行われた第1回インターボート・レガッタにおいて、

「神戸は4人漕ぎでは負けたが、ダブル・スカルと2人漕ぎ対等レースでは神戸が楽勝した」<sup>(29)</sup>

と書かれており、その艇種については注の中で、

「ダブル・スカル：一人が左右に1本ずつオールを漕ぐタイプ。これの2人漕ぎ。2人漕ぎ：ペアー・オールと言い、2人がそれぞれ両手で1本のオールを漕ぐ」<sup>(30)</sup>

と書かれていることから、競技用ボートのダブル・スカル種目とペア種目と考えられるが、ペア種目には舵付きペア種目と舵なしペア種目があるため、ペア種目の特定には至らなかった。

しかしこの記事により、明治4年（1871年）横浜で行われた第1回インターボート・レガッタで、ボート競技の種目が漕がれていたことが判明したと考えられる。

また神戸で漕がれていた種目を述べた個所であれば、フォーという種目についての注によれば、

「フォアー：4人が、それぞれ両手に1本のオールを持って漕ぐ」<sup>(31)</sup>

と書かれており、この種目もボート競技の種目だと思われるが、フォアー種目にも舵付きフォアーと舵なしフォアーがあることからボート競技の種目の特定はできなかったが、ボート競技の種目が漕がれていたことが判明したと考えられる。

したがって横浜で競技用ボートを使用したボートレースの記録は、明治4年（1871年）であると考えられるが、レガッタという言葉の本来の意味はイタリア語の「論争」であると言われており、海外では広くヨットなどの大会にもこの言葉が用いられている。

そして競技としてのボートレースのことを指してレガッタと呼ぶことの多い日本では、レガッタに参加したということから、競技用ボートレースに参加したと解釈されることが多いが、実はそれだけでは海軍の使用するカッター艇でのボートレー

スなのか、競技用ボートでのボートレースなのかは判別できないのではないと思われる。

つまりレガッタという言葉に対する解釈の違いや、ボートという言葉が持つ競技用と娯楽及び運搬用という意味の違いから、広い意味での明治2年のボートレース説が生まれたのではないだろうか。

### 3. 長崎におけるレガッタの起源

また長崎でのボートについては、先述のイギリス人ジャーナリストのジョン・レディ・ブラックは慶応元年（1865年）すでにボートやヨットのレースが居留地外人の娯楽とされていたと述べている。

そして横浜以外の居留地として、長崎で文久元年（1861年）9月26日火曜日に長崎レガッタが行われたことを伝えている。

J. C. ブラックによれば、その大会の役員は、F. W. ハロウス (Hallowes), R. N. チェアーマン (Chairman), W. M. ロビネット (Robinet), H. チャーチ (Howard Church), F. A. グルーム (Francis Groom) で、大会の内容は以下のようなものであったという。

1. 大浦レース  
ヨーロッパ人4人漕ぎボート。距離1,5マイル  
参加費5ドル、賞金25ドル、優勝と第2位のボートに懸賞
2. 九州レース  
日本船によるハンディーレース。距離1,5マイル  
優勝15ドル、第2位5ドル、第3位2ドル
3. 長崎カップ  
男子による4人漕ぎボート。距離1マイル  
参加費5ドル、優勝カップ  
総合優勝に75メキシコドル
4. 自家製の屋形船レース（ハンディーレース）  
距離1マイル、参加費飛び入り5ドル、応

募者2ドル

優勝20ドル、第2位10ドル

5. 長崎カップ  
シングルペア 距離1マイル、参加費3ドル  
優勝30ドルとカップ
6. 人々レース  
日本支那製以外によるハンディーレース  
距離1,5マイル、参加費5ドル、優勝25ドル、第2位10ドル、第3位5ドル
7. 帆船レース  
各種の帆船による3隻ごとのレース  
距離は役員が2マイル以下で決める。参加費5ドル  
優勝30ドルとカップ
8. イナカレース  
日本人の4人組によるハンディーレース  
距離1マイル、参加費飛び入り5ドル  
応募者2ドル、優勝20ドル、第2位10ドル

（原文のまま、居留地外人による・）  
横浜スポーツ草創史

またこの長崎レガッタでの詳しい成績は残っていないが、元治元年（1864年）に行われた4〜6人までの漕手による長崎カップの時は、ホルム・リンガー商会 (Holme Ringer & Co) を創設したF.ホルムらが優勝し、長崎カップの快走舟のレースではT. B. グラバー (T. B. Glover)<sup>(32)</sup> と弟のA. J. グラバー (A. J. Glover) の兄弟が優勝した。

また（居留地の窓から）の種目説明とこの長崎レガッタを比較した場合、横浜での4本オールレースは(1)の大浦レースと(3)長崎カップの4人漕ぎボートと同じような表現に思えるが種目の特定はできなかった。

さらに横浜での2双スカル対2双オールレースは(5)の長崎カップのシングルペアというどちらかの種目のようにも考えられるが、ペアという表現はボート種目では1人1本のオールを操る種目の表現に見られ、1人2本のオールを操るスカル



種目の表現には見られないことから、舵なしペアあるいは舵付きペアの可能性も十分に考えられるが、この言葉だけでは表現の違いがあるため詳しく判断することは困難であり、グラバー兄弟が優勝した快走舟のレースという表現からもグラバー兄弟が出場したのがボート競技だとしても種目の特定は困難であった。

その後、先述の横浜で行われた YARC 対 KRAC のインターポートレガッタに、明治 18 年 (1885 年) 長崎のクラブと上海ローイングクラブが加わり、4 港持ち回りのインターポートレガッタが開催されるようになるが、長崎と上海の団体の詳細は明らかにされていない。

しかし長崎で行われた長崎レガッタというレースが、ボートレースの種目として特定できなかったとしても、広義のレガッタという言葉から考えた場合には、記録に残るレガッタの起源としては明治 2 年 (1869 年) 4 月に行われた英国ヴィクトリア女王の誕生日を祝う記念ボートレースよりも、文久元年 (1861 年) 9 月 26 日火曜日に行われた長崎レガッタがより早い時期に行われたと考えられる。

そこで長崎でのボート競技について調べたところ、昭和 44 年 (1969 年) に開催された長崎国体に向けて、昭和 39 年 (1964 年) に長崎県漕艇協会が設立されていた。

しかし第二次世界大戦の被害により、それまでのボート活動を含めた多くの資料は紛失してしまったものと考えられるが、昭和 49 年 (1974 年) に長崎海軍伝習所の日々 (水田信利訳)<sup>(32)</sup> という本が発行され、安政 3 年 (1856 年) オランダ政府の勅命を受けて日本の将軍のためにキンデルダイク造船所で作られた蒸気船ヤパン (後の咸臨丸) を日本に回航した海軍中尉で軍医のヴィレム・ヨハン・コルネリス・ホイセン・ファン・カッテンディーケ (Willem Johan Cornrlis ridder Huijssen van Kattendijke)<sup>(33)</sup> の日記を翻訳したものであった。

それによると、安政 2 年 (1855 年) オランダ国王ヴィルヘルム三世が 1 隻の蒸気船を献上し、出島に居留し航海学およびその他の教育を担当していたのが第 1 次海軍教育班であった。カッテンディー

ケはその第 1 次海軍教育班と交代し、引き続き同様の教育を日本人に対して行う任務で日本に向かった。

それは、幕府が安政 2 年 (1855 年) 長崎に海軍士官養成のために設立した長崎海軍伝習所に学ぶ、幕臣や大藩藩士などを教育するという目的であった。

そして、この第 2 次海軍教育班の行った教育課程の中に漕手の受け持ちとして水兵の仕事練習と書かれていることから、日本人もボートを漕いだ可能性が認められた<sup>(34)</sup>。

そしてカッテンディーケによれば、第 1 期から引き続き学んでいた勝麟太郎 (海舟) は、新造されたカッターを暗礁に乗り上げてしまい修理の必要を生じたと述べていることから、多くの日本人たちが練習の一環としてカッターを漕ぐ技術や操船術を習得した可能性も認められた。

このようにして、長崎海軍伝習所で学んだ多くの日本人たちは自分たちが学んだ事と、長崎での見聞を広めていったとも思われるが、その中には当時の長崎港内に停泊した多くの外国艦船がカッターを使用して、陸上との連絡を図っていたと思われることから、先日のような口伝が生まれていったと思われるのである。

#### 4. まとめ

以上のような既存記録の検証と新しい資料の発見により、横浜外国人居留地におけるボートレースの起源と長崎におけるレガッタの起源について検討を行ってきた結果、いままで記録として残されていたものの中で、ボートレースの起源とレガッタの起源と思われる年代については、修正が必要ではないかと考えられた。

つまりレガッタの中で、明らかにボート競技に用いられる艇を用いて行われたボートレースがあった場合を、ボート競技の起源とする場合と、レガッタの中でボート競技に用いられる艇の種類が特定できなかったとしても、ボートレースがあった場合をレガッタの起源とする場合の両方が認められると考えられる。

すなわち、ボートレースの起源は、明治2年(1869年)5月24日横浜でイギリス水兵により行われた英国ビクトリア女王の誕生日を祝う記念レースよりも、明治4年(1871年)横浜で行われた第1回インターボート・レガッタが相応しいのではないかと考えられる。

また、レガッタの起源は、明治2年(1869年)5月24日横浜でイギリス水兵により行われた英国ビクトリア女王の誕生日を祝う記念レースよりも、文久元年(1861年)9月26日火曜日に行われた長崎レガッタに求めた方が現時点では相応しいのではないかと考えられる。

さらに初めてカッターを漕いだ時期については、カッティンデーケの日記に見られるように、安政2年(1855年)長崎の長崎海軍伝習所において、日本人に対してオランダ人によるカッター訓練が行われたと考えられる。

しかし慶応2年(1866年)創設のバージー・クラブの活動内容及び、長崎レガッタの詳細については今後の研究を待たなくてはならない。

#### 【注】

- (1) 現在のボート団体名称は端艇部、漕艇部、ボート部が混在しているためここではボート部に統一した。
- (2) バアージ・バージー・バージは河川交通や荷物の運搬に使われた舳や小型の舟。
- (3) 財団法人大日本体育協会編発行『大日本体育協会史』下巻〔日本漕艇協会史〕1937年、p.1385。
- (4) 漕手(ボート選手)が座る席が動かず上半身のみで漕ぐ固定席艇(フィックス艇)に対して、漕手が座るシートが前後に動く形式(スライディングシート)。
- (5) 久保勘三郎・宮田勝善『ボート五十年』時事通信社、1957年、p.9。
- (6) 日本体育協会編発行、『スポーツ八十年史』1959年、p.247。
- (7) 同上、p.845。
- (8) 日本体育協会編発行『日本体育協会五十年史』1963年、p.624。
- (9) 宮田勝善『ボート百年』時事通信社、1966年、p.93。
- (10) バッテラとはポルトガル語で小舟のこと。長崎で停泊するポルトガル船と陸上との連絡用に使用された。この小さいボートの呼び方は、形が似ていたことからバッテラ鯨に名前を残していると思

われ、北前船の航路である青森では小舟のことをバッテラと呼ぶ地域もあるという。明治初めのころ捕鯨船の古い舳を見た市民や、譲り受けて漕ぎだした学生たちの間でこのバッテラという呼称を転用したのではないかと思われる。

また本格的な競技用ボートの無い時代においては、海軍のカッターやバッテラなどの呼称が混在して用いられたと思われる。

- (11) 今村嘉雄『日本体育史』不昧堂、1970年、p.331。
- (12) 遊津孟『日本スポーツ創世記』社団法人・全国大学体育連合図書1、p.37。
- (13) 剣牛レースとは別名「ザ・ボートレース」とも呼ばれる最古の大学対抗ボートレース。1829年に初めてイギリスのオックスフォード大学とケンブリッジ大学の間で行われた。会場はテムズ川。
- (14) 社団法人日本漕艇協会発行『漕艇75年』1995年、p.12。
- (15) 久保勘三郎・宮田勝善『ボート五十年』時事通信社、1957年p.13。
- (16) カッターを細くした小型のボートのこと。
- (17) カッターとは大型船舶搭載の陸上等との連絡用に使われるボートで、帆を備えているものは帆走もできた。
- (18) 岸野雄三編著者代表『新版、近代体育スポーツ年表』大修館書店、1996年p.30。
- (19) 棚田真輔『神戸スポーツ草創史』道と書院、1976年、p.15。
- (20) 棚田真輔『神戸スポーツ草創史』道と書院、1976年、p.27。
- (21) 棚田真輔『神戸スポーツ草創史』道と書院、1976年、p.28。
- (22) レガッタ(Regatta)という言葉はイタリア語で(論争)を指しベネチアのゴンドラを漕ぐ船頭たちの競漕会にレガッタを転用したものだと考えられている。したがってレガッタという言葉は日本では、ボートレースを指す場合が多いが、海外ではゴンドラ競漕やカヌー及びヨットなどの競漕も広く呼ばれている。
- (23) アスレティズム思想とは、19世紀中ごろイギリスで生まれた。運動競技を推奨しクリケットやフットボール、ボートなどの集団スポーツ体験を通して人格陶冶を図ろうという教育手段。
- (24) 山本邦夫・棚田真輔『横浜スポーツ草創史』道と書院、1977年、pp.105, 107, 112。
- (25) 舵付き4は4人が一人一本のオールを使用する艇で号令係のコックスというポジションがあり5人乗り組みの艇をいい、同様に4人一人一本のオールを使用するが、コックスが乗り込んでいない艇である舵なし4と区別している。
- (26) ダブルスカルは一人で片手1本ずつ両手で2本のオールを操り2名乗り込む種目、舵なしペアは一人で一本のオールを操るものが2名乗り込む種目。

- (27) 高木應光監訳, 長谷川芙美子翻訳『ハロルド・S. ウィリアム著 神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ百年史』神戸外国人居留地研究会年報『居留地の窓から』神戸外国人居留地研究会第4号, 2004年。
- (28) 同上, p. 145.
- (29) 同上, p. 146.
- (30) 同上, p. 146.
- (31) T. B. グラバー (Thomas Blake Glover) はスコットランド生まれの商人。大浦海岸近くで慶応元年 (1865年) 始めて蒸気機関車を走らせた。グラバー商会の破産後, 三菱財閥の相談役を務めた。後年東京市芝区に居住し鹿鳴館の運営に寄与した。
- (32) ヴィレム・ヨハン・コルネリス・ホイセン・ファン・カッテンディーケ (Willem Johan Cornelis ridder Huijssen van Kattendijke) はオランダの海軍軍人, 蒸気船ヤパン号船長。
- (33) 永田信利訳『長崎海軍伝習所の日々』平凡社, 1974年。
- (34) 同上, p. 27.

#### 参考文献

- 浅見俊雄・宮下充正・渡辺融編 (1984) 現代体育・スポーツ体系, 講談社。
- 大日本体育協会編 (1937) 大日本体育協会史下巻 [日本漕艇協会史], 大日本体育協会。
- 同志社艇友会 (1991) 同志社ローイング100年, 同志社艇友会。
- 半藤一利編 (1992) 東京大学漕艇部百年史, 東京大学淡青会。
- 菱谷武平 (1988) 長崎外国人居留地の研究, 九州大学出版会。
- 今村嘉雄 (1970) 日本体育史, 不味堂。
- 今村嘉雄 (1953) 西洋体育史, 日本体育社。
- 今村嘉雄・石井トミ (1968) ライス・世界体育史, 不味堂書店。
- 加藤橋夫訳 (1976) 体育の世界史, ベースボール・マガジン社。
- 加藤橋夫・田中鎮雄訳 (1973) 近代イギリス体育史, ベースボール・マガジン社。
- 川崎晴朗 (2002) 築地外国人居留地, 雄松堂出版。
- 木村毅 (1981) 日本スポーツ文化史, ベースボール・マガジン社。
- 岸野雄三編著 (1996) 新版近代体育スポーツ年表, 大修館書店。
- 古城庸夫 (2005) コーチ学入門, 江戸川大学スポーツビジネス研究所。
- 古城庸夫 (2000) ボート競技の歴史年表, 江戸川大学スポーツビジネス研究所。
- 久保勘三郎 (1936) 東京帝国大学漕艇部五十年史, 東京帝国大学漕艇部。
- 久保勘三郎・宮田勝善 (1957) ボート五十年, 時事通信社。
- 蔵前漕艇倶楽部 (2001) 東京工業大学端艇部100年史, 蔵前漕艇倶楽部。
- 京都大学体育会端艇部 (2000) 京都大学端艇部百年史, 京都大学体育会端艇部。
- 松村高夫・山内文明訳 (1995) 英国スポーツの文化, 同文館出版社。
- 明治大学端艇部編 (2004) 明治大学体育会端艇部百年史, 明治大学端艇部実行委員会。
- 三田漕艇倶楽部 (1980) 百年のあゆみ, 慶応義塾体育会端艇部。
- 宮田勝善 (1976) 改定新版ボート百年, 時事通信社。
- 永田信利訳 (1974) 長崎海軍伝習所の日々, 平凡社。
- 日本大学ボート部 (2005) 力漕百年, 日本大学体育会ボート部。
- 日本漕艇協会 (1995) 漕艇75年, 日本漕艇協会。
- 日本体育協会編 (1959) スポーツ八十年史, 日本体育協会。
- 日本体育協会編 (1963) 日本体育協会五十年史, 日本体育協会。
- 四神会 (1983) 一橋ボート百年の歩み, 四神会。
- 棚田真輔 (1976) 神戸スポーツ草創史, 道と書院。
- 東北大学漕艇部百周年史部会 (2003) 東北大学漕艇部百年史, 東北大学漕艇部百周年記念事業会。
- 稲門艇友会 (2002) 漕艇部の百年早稲田ボート文化史, 100年史編纂委員会。
- 東京外語艇友会 (2001) 外語ボート100年, 東京外語艇友会。
- 東京経済大学葵水会 (2004) 100年史, 東京経済大学葵水会。
- ウィリアム: 高木應光監訳・長谷川芙美子訳 (2004) 神戸レガッタ・アンド・アスレチック・クラブ百年史, 神戸外国人居留地研究会年報, 第4号。
- 山本邦夫・棚田真輔 (1977) 横浜スポーツ草創史, 道と書院。
- 遊津孟 (1975) 日本スポーツ創世記』, 全国大学体育連合。